

学習ポスター

百人一首

小倉百人一首は、鎌倉時代に藤原定家によって選ばれた和歌集です。飛鳥時代の天智天皇から、鎌倉時代の順徳院まで、百人のすぐれた歌人の和歌が一首ずつ収められています。

番号	歌人	句
1	天智天皇	秋の田の かりほの庵の 苦をあらみ 我が衣手は 露にぬれつつ
2	持統天皇	春過ぎて 夏来にけらし 白妙の 衣干すてふ 天の香具山
3	柿本人麻呂	あしひきの 山鳥の尾の 垂り尾の 長々し夜を 独りかも寝む
4	山部赤人	田子の浦に 打ち出でて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ
5	猿丸大夫	奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の 声聞く時ぞ 秋は悲しき
6	中納言家持	鶺鴒の 渡せる橋に 置く霜の 白きを見れば 夜ぞ更けにける
7	阿倍仲麻呂	天の原 振りさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも
8	喜撰法師	我が庵は 都のたつみ しかぞ住む 世を宇治山と 人は言ふなり
9	小野小町	花の色は 移りにけりな いたづらに 我が身世にふる ながめせしみに
10	蝉丸	これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも 逢坂の関



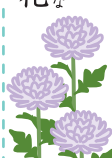
※赤字は決まり字 (そのまま読まれれば、どの句か確定できる部分) です。

※ふりがなは現代仮名づかいで記載しています。

番号	歌人	句
24	菅家	このたびは 幣も取りあへず 手向山 紅葉の錦 神のまにまに
25	三条右大臣	名にし負はば 逢坂山の さねかつら 人に知られで くるよしもがな
26	貞信公	小倉山 峰のみみぢ葉 心あらば 今一度の みゆき待たなむ
27	中納言兼輔	みかの原 わきて流るる 泉川 いつ見きとてか 恋しかるらむ
28	源宗于朝臣	山里は 冬ぞ寂しさ まさりける 人目も草も かれぬと思へば
29	凡河内躬恒	心当てに 折らばや折らむ 初霜の 置きまどはせる 白菊の花
30	壬生忠岑	有明の つれなく見えし 別れより 暁ばかり 憂き物は無し
31	坂上是則	朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに 吉野の里に 降れる白雪
32	春道列樹	山川に 風のかけたる しがらみは 流れもあへぬ 紅葉なりけり
33	紀友則	久方の 光のどけき 春の日に 静心なく 花の散るらむ

百人一首の和歌は、5・7・5の上の句と、7・7の下の句の合計31文字(短歌の形式)で作られています。

(上の句) おくやまに もみじふみわけ なくしかの
 (下の句) こえきくときぞ あきはかなしき



23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
大江千里 おおえのちさと	文屋康秀 ぶんやのやすひで	素性法師 そせいほうし	元良親王 もとよししのう	伊勢 いせ	藤原敏行朝臣 ふじわらのとしゆきあそん	在原業平朝臣 ありわらのなりひらあそん	中納言行平 ちゅうなごんゆきひら	光孝天皇 こうこうてんのう	河原左大臣 かわらのさだいじん	陽成院 ようせいいん	僧正遍昭 そうじょうへんじょう	参議 篁 さんぎたかむら
月見れば 千々に物こそ 悲しけれ 我が身一つの 秋にはあらねど	吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を あらしと言ふらむ	今来むと 言ひしばかりに 長月の 有明の月を 待ち出でつるかな	侘びぬれば 今はた同じ 難波なる みをつくしても 逢はむとぞ思ふ	難波瀉 短き葺の ふしの間も 逢はでこの世を 過ぐしてよとや	住の江の 岸に寄る波 よるさへや 夢の通ひ路 人目よくらむ	ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 から紅に 水くくるとは	立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる まつとし聞かば 今歸り来む	君がため 春の野に出でて 若菜摘む 我が衣手に 雪は降りつつ	みちのくの しのぶもぢずり 誰ゆゑに 乱れ初めにし 我ならなくに	筑波嶺の 峰より落つる みな <small>の</small> 川 恋ぞ積もりて 淵となりぬる	天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ をとめの姿 しばしとどめむ	わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと 人には告げよ 海人の釣舟
												

46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
曾禰好忠 そねのよしただ	謙徳公 けんとくこう	中納言朝忠 ちゅうなごんあさただ	権中納言敦忠 ごんちゅうなごんあつただ	清原元輔 きよはらのもとすけ	壬生忠見 みぶのただみ	平兼盛 たいらのかねもり	参議等 さんぎひとし	右近 うこん	文屋朝康 ぶんやのあさやす	清原深養父 きよはらのふかやぶ	紀貫之 きのつらゆき	藤原興風 ふじわらのおきかせ
由良のときを 渡る舟人 かちを絶え 行方も知らぬ 恋の道かな	あはれとも 言ふべき人は 思ほえで 身のいたづらに なりぬべきかな	逢ふ事の たえてしなくは なかなか 人をも身をも 恨みざらまし	逢ひ見ての 後の心に 比べれば 昔は物を 思はざりけり	契りきな かたみに袖を しばりつつ 末の松山 波越さじとは	恋すてふ 我が名はまだき 立ちにけり 人知れずこそ 思ひ初めしか	忍ぶれど 色に出でにけり 我が恋は 物や思ふと 人の問ふまで	浅茅生の 小野の篠原 忍ぶれど 余りてなどか 人の恋しき	忘らるる 身をば思はず 誓ひてし 人の命の 惜しくもあるかな	白露に 風の吹きしく 秋の野は 貫きとめぬ 玉ぞ散りける	夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿るらむ	人はいさ 心も知らず 古里は 花ぞ昔の 香にほひける	誰をかも 知る人にせむ 高砂の 松も昔の 友ならなくに
												

番号	歌手	句
47	恵慶法師	八重葎 茂れる宿の 寂しきに 人こそ見えね 秋は来にけり
48	源 重之	風をいたみ 岩打つ波の おのれのみ 砕けて物を 思ふころかな
49	大中臣 能宣朝臣	御垣守 衛士のたく火の 夜は燃え 昼は消えつつ 物をこそ思へ
50	藤原 義孝	君がため 惜しからざりし 命さへ 長くもがなと 思ひけるかな
51	藤原実方朝臣	かくとだに えやはいぶきの さしも草 さしも知らじな 燃ゆる思ひを
52	藤原道信朝臣	明けぬれば 暮るるものとは 知りながら なほ恨めしき 朝ぼらけかな
53	右大将道綱母	嘆きつつ 独り寝る夜の 明くる間は いかに久しき ものとかは知る
54	儀同三司母	忘れじの 行末までは かたければ 今日を限りの 命ともがな
55	大納言公任	滝の音は 絶えて久しく なりぬれど 名こそ流れて なほ聞こえけれ
56	和泉式部	あらざらむ この世のほかの 思ひ出に 今一度の 逢ふこともがな
57	紫式部	めぐり逢ひて 見しやそれとも 分かぬ間に 雲隠れにし 夜半の月かな
58	大弐三位	有馬山 猪名の笹原 風吹けば いでそよ人を 忘れやはする
59	赤染衛門	やすらはで 寝なましものを さ夜更けて かたぶくまでの 月を見しかな

番号	歌手	句
74	源俊頼朝臣	憂かりける 人をはつせの 山おろしよ 激しかれとは 祈らぬものを
75	藤原基俊	契りおきし させもが露を 命にて あはれ今年の 秋もいぬめり
76	法性寺入道 前関白太政大臣	わたの原 漕ぎ出でて見れば 久方の 雲居にまがふ 沖つ白波
77	崇徳院	瀬を早み 岩にせかるる 滝川の われても末に 逢はむとぞ思ふ
78	源兼昌	淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に 幾夜寝覚めぬ 須磨の関守
79	左京大夫顕輔	秋風に たなびく雲の 絶え間より もれ出づる月の 影のさやけさ
80	待賢門院堀河	長からむ 心も知らず 黒髪の 乱れて今朝は 物をこそ思へ
81	後徳大寺 左大臣	ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば ただ有明の 月ぞ残れる
82	道因法師	思ひわび さても命は あるものを 憂きに堪へぬは 涙なりけり
83	皇太后宮 大夫俊成	世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる
84	藤原清輔朝臣	長らへば またこのごろや しのばれむ 憂しと見し世ぞ 今は恋しき
85	俊恵法師	夜もすがら 物思ふころは 明けやらで 閨のひまさへ つれなかりけり
86	西行法師	嘆けとて 月やは物を 思はする かこち顔なる 我が涙かな

73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	
前中納言匡房 さきのちゆうなごんまきふさ	紀伊 きい	祐子内親王家 ゆうしなしいしんのうけの	大納言経信 だいなごんつねのぶ	良暹法師 りょうぜんほうし	能因法師 のういんほうし	三条院 さんじょういん	周防内侍 すおうのなはいし	大僧正行尊 だいうじょうじぎょうそん	相模 さがみ	権中納言定頼 ごんちゆうなごんさだより	左京大夫道雅 さきょうだいいぶみちまさ	清少納言 せいしょうなごん	伊勢大輔 いせのたいふ	小式部内侍 こしきぶのなはいし
高砂の たかさごの 尾上の桜 おのえのすくらの 外山の霞 とやまのかすみ 咲きにけり たたずもあらなむ	音に聞く おとにきく 高師の浜の たかしはまの あだ波は なみのなみ	夕されば ゆふされば 門田の稲葉 かどたのいなば おとづれて あきかせ	寂しさに さびさに 宿を立ち出でて やどをたちいでて ながむれば ながむれば いづこも同じ いづこもおなじ 秋の夕暮れ あきのゆうぐれ	嵐吹く あらしふく 三室の山の みむろのやまの もみぢ葉は もみぢは	心にも こころにも あらで憂き世に あはれと世に 長らへば ながらへば 恋しかるべき こいしかるべき 夜半の月かな よわのつきかな	春の夜の はるのよの 夢ばかりなる ゆめばかりなる 手枕に たまくらに かひなく立たむ かひなくたたまむ 名こそ惜しけれ なこそおぼしけれ	もろともに もろとも あはれと思へ あはれとおもへ 山桜 やまざくら 花よりほかに はなよりほかに 知る人もなし しる人もなし	恨みわび うらみわび 干さぬ袖だに ほかさぬそでだに あるものを あるものを 恋に朽ちなむ こいにくちなむ 名こそ惜しけれ なこそおぼしけれ	朝ぼらけ あさぼらけ 宇治の川霧 うじのかわきり 絶え絶えに たえたえに 現れわたる あらわわたる 瀬々の網代木 せせのあじろぎ	今はただ いまはただ 思ひ絶えなむ おもひたえなむ とばかりを とばかりを 人づてならで ひとづてならで 言ふよしもがな いふよしもがな	夜をこめて よをこめて 鳥の空音は とりそらねは はかるとも はかるとも よに逢坂の よにおうさかの 関は許さじ せきはゆるさじ	いにしへの いにしへの 奈良の都の ならみやこの 八重桜 やえざくら 今日九重に きょうこのえに にほひぬるかな にほひぬるかな	大江山 おほえやま いく野の道の いくののちの 遠ければ とほければ まだふみも見ず まだふみも見ず 天の橋立 あまはしたて	

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	
順徳院 じゅんとくいん	後鳥羽院 ごとばいん	従二位家隆 じゆににいえたか	権中納言定家 ごんちゆうなごんさだいえ	前太政大臣 さきのだいじやうだいじん	前大僧正慈円 さきのだいじょうじえん	入道 にゅうどう	参議雅経 さんぎまさつね	鎌倉右大臣 かまくらうだいじん	二条院讚岐 にじょういんのさぬき	後京極摂政 ごきょうごくせつせい	殷富門院大輔 いんぶもんいんのたいふ	式子内親王 しきしなしいしんのう	皇嘉門院别当 こうかもんいんのべつどう	寂蓮法師 じやくれんほうし
ももしきや ももしきや 古き軒端の ふるきのきばの 忍ぶにも しのぶにも 昔なりけり むかしなりけり	人もをし ひとをし 人も恨めし ひとをうらめし あぢきなく あぢきなく 物思ふ身は ものおもふみは	風そよぐ かぜそよぐ 櫛の小川の かみの小川の 夕暮は ゆうぐれは	来ぬ人を こぬひとを まつほの浦の まつほのうらの 夕風に ゆうかぜに 焼くや藻塩の やくやもしのの 身も焦がれつつ みもこがれつつ	花誘ふ はなをさそふ 嵐の庭の あらしのにわの 雪ならで ゆきならで	おほけなく おほけなく 憂き世の民に うれしきよのたみに おほふかな おほふかな 我が立つ袖に わがたつそでに 墨染の袖 すみぞめのそで	み吉野の よしのの 山の秋風 やまのあきかぜ さ夜更けて さよふけて 古里寒く ふるさとさむく 衣打つなり ころもうちつなり	世の中は よのな中は 常にもがもな つねにもがもな 渚漕ぐ なみぞうぐ 海人の小舟の あまのこぶねの 綱手かなしも つなてかなしも	我が袖は わがそでは 潮干に見えぬ しほびに見えぬ 沖の石の おきのいしの	きりぎりす きりぎりす 鳴くや霜夜の なぐやしもよの さむしろに さむしろに 衣片敷き ころもかたし 独りかも寝む ひとりかもねむ	見せばやな みせばやな 雄島の海人の おしまのあまの 袖だにも そでだにも 濡れにぞ濡れし ぬれにぞぬれし 色は変はらず いろはかわはず	玉の緒よ たまのいとよ 絶えなば絶えね たえなばたえね 長らへば ながらへば 忍ぶることの しのぶこと 弱りもぞする よわもぞする	難波江の なにわえの 葦のかりねの あしのかりねの ひとよゆゑ ひとよゆゑ みをつくしてや みをつくしてや 恋ひわたるべき こひわたるべき	村雨の むらさめの 露もまだ干ぬ つゆもまだかぬ まきの葉に まきのはに 霧立ち昇る きりたのぼる 秋の夕暮れ あきのゆうぐれ	

一字決まりを覚えよう！ 百人一首の札を取り合うかるたをする時、18番「住の江の…」、22番「吹くからに…」、57番「めぐり逢ひて…」、70番「寂しさに…」、77番「瀬を早み…」、81番「ほととぎす…」、87番「村雨の…」の七首は、最初の一字が読まれた時にどの句か確定するので、覚えておくとはいやく札を取れるよ。「む・す・め・ふ・さ・ほ・せ」と覚えよう！